

2001年

胸中山水化一望月洋史展 〈オジロ〉

日辰画廊

文●ワシオ・トシヒコ Toshihiko Washio

「天井に朱きいろいで / 戸の隙を洩れ入る光、// 鄙びたる 軍樂の憶ひ / 手にてなす なにごともなし。」

中原中也の詩、「朝の歌」の第一連である。

「天井に朱きいろいで / 戸の隙を洩れ入る光、」は、現実上の対象観察による眼の所産だ。「鄙びたる 軍樂の憶ひ / 手にてなす なにごともなし。」が、それによって喚起される頭脳の記憶作用、つまりイメージというわけだろう。

人間の眼と頭脳との連動リレーションは、このようにきわめて興味深い。何かの動静や表象をじっと観察していると、何かだんだん何かでなくなり、新しい何かは突如として現前されたりすることがよくある。

『魚達の所作』と題される望月洋史の平面作品に接したのが、1980年代後半だった。いくつか均等に矩形分割された紙の各画面いっばいに、魚たちの頭部や全身の表象が、丸ごと墨痕鮮やかに速写されている。ピチピチはねる魚たちをそのまま墨線で釣り上げたような図柄が、何ともなまなましく伝わってきたのだ。

以来『魚達の所作』は、シリーズのように幾度か個展として催されたから、われわれにも記憶されるモノクローム作品となった。描かれる対象が墨の濃淡や強弱による若干のニュアンスの差異こそあれ、対象の再現性をまだ明らかに留めて現在へ至っている。

ところが今回出品された全13点の対象は、見慣れた魚でない。オジロという種類の威風堂々のワシだ。しかもその対象が、再現性から解き放たれる方向性を示唆するだけでなく、水墨画の胸中山水のような様相を呈している。

画面から鋭い眼と嘴を探せば、確かにオジロを描いている痕跡が窺える。だが一步引いて全体を眺めると、定かでないフォルムが空間全体にすっかり溶解し、あたかも胸中山水に誘い入れられる感がある。にじみ以外、必ずしも水墨画の骨法を強く意識しているとは思われないけれど、筆勢が空気を呼び込み、オジロの軀が、山あり、崖あり、溪あり、水あり、繁茂ありといった自然の形態と化していることに驚きを禁じ得ない。禽の所作を媒介として生まれた作家の胸中の顕現、といってもよいのではなかろうか。

そういえば作家は、美術学校卒業後、ポラロイド写真を使って制作していた時期がある。その頃だろうか、画廊の天井の蛍光灯だけを扱った或る個展のコメントとして、「モネは水面をMedium (媒介) としたのであって、彼の扱った素材はMedium へのあくなきImagination (近接作用)」と記したことがある。現在もまた、依然としてそうしたコンセプトの延長線上にある制作、といってもよいのかもしれない。なぜなら彼は今回も禽を媒介としたのであり、媒介へのあくなき近接作用としての胸中山水化に他ならないからだ。

緊迫感いっばいのオジロの所作から胸中山水を導き入れた作家は、果たしてこの先、このまま限りなく自由で深い水墨画の世界へと突き進んで行くのだろうか。それとも……………。

